

医芸歌壇



夕映えのなか

青森 秋霧 朝光

吹く風に池の噴水かたむきて淡き虹たつ夕映えのなか

湯あがりの火照りを冷ます橋のつえ小春日和のせせらぎの音
嗚みあわぬ会の流れに萎えていく心あまして冷め茶を飲む

いくたびも滑り落ちまた雪山に挑みて登る羚羊の子は

一面に馬鈴薯の花咲きそろい変わらずつづく夏のはじまり

熱海旅行

千葉 蒲谷 玲子

貫一お宮の話をすれば娘はたゞに「尾崎紅葉」「あほな話ね」と

四月より大学生となる娘のデザートは特注ヘグレートアップ

ボート飛ばせばあの初島まではひこつ飛びこふと思いきり着家の田んぼ

空と海きり立つ名所錦が浦の崖にせり出す美しひとつ松

大学生となる娘と影法師のミニキニアすめな幸せになつて下つた

早春

東京 小松 安彦

幼稚園の庭に八つの雪たるままだ残りある節分の夜

二分咲きの紅梅の枝のあはひより火星輝く立春の宵

金星と再び会ひて春分の夕暮にするもの思ひ

横顔に見惚れてをればムスクルスマテルノライドマストイデウス

熱帯魚のやつなる君と深海魚の如き我とが歌舞伎座にゐる

早春

神奈川 武井 忠夫

しだれ梅のふぶめる霜朝な朝な温む日差しに紅を増す

陽も柔み水温むらし顔に集つ池の金魚の動き日々増す

水舌ゆ白甲這い出でて夜籠もる春なお浅き亀の蠢き

啓蟄の季巡り来て水舌ゆ這い出でて柔む陽を浴びる亀

萌え出でん季に先がけ道の端のユフシの花の味き溢れたる

真岡線 S は帰つたが

東京 田村 豊幸

S 上を見れば万歳それつきり帰らぬ友に「ああそつ」の声

龍の玉ままごころの妹はスイカですよと持ってきたっけ

なにゆえに「き人はかりの夢を見るまきのうも今朝も別の人なり

梅の鉢白の群がドツと来てゆらゆらさせてサツと消えたり

ペラントで枯らした盆栽今年また「ごめん」と毎日水をやれずに

茨城空港

茨城 羽生 藤伍

筆談

東京 横田 英夫

茨城の空港「階のレストラン売店に客背まで溢る

茨城の空港開きし記念なり霞ヶ浦に七色帆船

早春の風は湖上にやゝ強く七隻の船何れも満帆

七隻の船は夫々七色の大き帆を張り湖上に並ぶ

白鳥ら湖上に舞えど逆風にしばし虚空にとどまる如し

特別支援学校校医定年を迎へて 東京 林 宏匡

初めての校医務めし運動会太鼓のひびきなつかしきかな

小西君胸に抱へし太鼓打つ音轟き湧く運動会

泣く童べ涎を垂らす童へ在り校医の心匠しつと診つ

校医とし三十六年の勤め終へ校舎を眺め別れを惜しむ

十二代校長先生の御近影一人一人を想ひ出づるも

桜 東京 初芝 澄雄

トンネルを出でし所に駅舎あり千本桜の指針に沿いぬ

小松川千本桜花溢れ芝生に座せる人々多し

花桃の美しく咲く町続く都の西北早大通り

神田川岸を埋める花の列園口辺り人影繁し

神田川水面を眺め驚きぬ花びら浮きて群れ流れ行く

補聴器の会話われにはもどかしく同期の会も遠過ぎており
寒き夜の水交会の「錨まつり」同期集いて酒酌み交わす
筆談のメモ書き呉るる友の居て心温もる如月の夜
俳誌「鶴」波郷と飲みしことどもをメモに記して友は微笑む
吾もまた「フアンシア」等若き日の思い出記し話は尽きず



カット 村山 正則